

## 語り手ピップの年齢

### - *Great Expectations* の 2 つの現在 -

長谷川 雅世

*Great Expectations* は、主人公ピップ(Pip)が自らの過去を語る自伝形式の一人称小説である。それゆえこの小説の解釈には、登場人物ピップやストーリーを知るのと同様に、語り手ピップについての十分な理解が必要だ。特に、彼が自らの過去を語る動機を理解することは、この小説を解釈する上で重要なことである。そのためには、どのような状況で語っているのかを知らなければいけない。このとき最も大事なことは、彼がいつこの物語を語っているのかを知ることである。つまり、ピップは何歳の時に語っているのだろうか。

従来の批評家たちは、語り手ピップを単に「語り手」、或いは“the adult Pip”<sup>1</sup>や“an older man”<sup>2</sup>と漠然と呼んで、その年齢に関心を示していない。確かに、語り手ピップの年齢に言及している批評家がないわけではない。フィールディング(Fielding)は、マグウィッチ(Magwitch)の死の“twelve years or more later”に語り始めているとする<sup>3</sup>。田辺氏は語り手ピップを「老境にさしかかった語り手」<sup>4</sup>と呼び、一方、廣野氏は語り手ピップの現在を「中年に至った現在」<sup>5</sup>と称している。しかし、彼らはその具体的な根拠を示さない。ただし、専ら小説中の時事的な記述のみに注目し小説の時代設定を特定しようとするクロノロジーの批評では、語り手ピップの年齢は明記されている。例えばサドリン(Sadrin)は彼を 53 歳ぐらい<sup>6</sup>、メッキア(Meckier)は 55 歳<sup>7</sup>、パロワシアン(Paroissien)は 60 歳過ぎだとする<sup>8</sup>。冒頭場面の年代についての解釈の相違で多少年齢に差はあるが、彼等は一様に語り手の現在をこの小説連載当時の 1860-61 年としているのが特徴だ<sup>9</sup>。小説の終りでのエステラ(Estella)との再会から 20 年ほど後に、ピップが過去を語っていると考えている。

ところで、登場人物ピップは、いつ頃生まれたのだろうか。ピップが 7 歳のときに出会った兵士たちは、1837 年に即位したヴィクトリア女王ではなく、「国王陛下」<sup>10</sup>の名の下に脱獄囚を追跡している。また、ピップが 23 歳のときにボートを漕いだテムズ川には、1831-32 年に取り壊された「旧ロンドン橋」(376)が架かっている。さらに、23 歳のピップが見たテムズ川の風景には、1824 年に着工された新ロンドン橋の姿が一切見られない。これらのことから、ピップの誕生日は 1800 年前後だと判断できる。

主人公ピップの誕生を 1800 年前後とするのは、もちろん、上述のクロノロジーの批評

家たちも指摘するところである。それゆえ、彼等が言うようにピップが過去を語っているのが小説の連載当時だとすれば、彼の年齢は 60 歳前後になる。だが、語り手の現在を 1860-61 年だとする彼等の根拠には十分納得がいかない。

例えば彼等は、小説冒頭の“that universal struggle”(3)をダーウィンの *The Origin of Species*(1859)からの引用とし、語り手の現在がその著作の出版以降である証拠だとする<sup>11</sup>。しかしディケンズは、1838-39 年連載の *Nicholas Nickleby* でも人生を“our rough struggles with the world”<sup>12</sup>と表しているように、彼の作品では、そのような表現は珍しくない。敢えてそれをダーウィンの言葉とする必要はないのである。別の根拠である“young Rantipole”(101)も同様だ。小説中で少年ピップを呼ぶのに使われる“Rantipole”は、メッキアが主張する 1850 年代に広まったナポレオン 3 世のあだ名であるだけではない<sup>13</sup>。昔からあるごろつきを指す語、或いはチェイニー(Chaney)が言うような 1818 年出版の道徳物語に登場する子供の名前でもある<sup>14</sup>。だから、この言葉がナポレオン 3 世のあだ名とは限定できない。それに、そもそもこれは語り手ではなく直接話法で書かれたミス・ジョー(Mrs. Joe)の言葉である。確かに、1861 年のチャタムでの囚人の暴動(257)や 1860 年のテンプル周辺での築堤工事(309)は小説連載当時の出来事である。語り手ピップのこれらへの間接的な言及は、彼が 1860-61 年にこの物語を語っている可能性を示す証拠とはなりえる<sup>15</sup>。だが、パロワシアン自身が“chronological mismatches”<sup>16</sup>の存在を認めているこの小説では、これらも単なるアナクロニズムかもしれない。つまり、クロノロジーの批評家すら、アナクロニズムの存在を認めざるをえないこの小説では、小説中の歴史的な出来事からのみ語り手ピップの年齢を推測するには限界がある。小説中の時事的な出来事を、ピップの年齢を推測する材料にするか、単なるアナクロニズムとするかが、全く主観的な判断に頼らざるをえないからである。

そこで本論文では、語り手ピップの年齢を、小説中の時事的な記述でなく小説の内容から推測する。そして彼の年齢を特定し、その過程で彼が自らの過去を語る理由を明らかにする。

この小説の主題がピップの罪の意識であることは、多くの批評家が一致している。そしてその罪の意識の原因には多様な解釈がある。例えば、ステンジ(Stange)はピップに限らず罪は生の常状だとし<sup>17</sup>、バン・гент(Van Ghent)は己の目的のために他者を道具にす

るといふ罪をエヴリマンであるピップが犯したことが彼の罪の意識の原因だとする<sup>18</sup>。モイナハン(Moynahan)は、ピップの罪の意識は彼の意識されない分身であるオーリック(Orlick)の犯した罪から生じていると主張する<sup>19</sup>。

こうした解釈の多様性は次に挙げるピップの罪の意識の2つの特質に起因している。1つ目は、マグウィッチのための窃盗やハーバート(Herbert)への暴力、ジョー(Joe)への恩知らずな態度などの複数のことへの罪悪感が相まってピップの罪の意識が成っていること。2つ目は、ピップが罪だと考えている彼の行為は、ジョーに対する恩知らずな態度を除けば、罪だとはっきり定義できないこと。そのことをミラー(Miller)は、“[Pip] has himself been guilty of the act of kindness”<sup>20</sup>と、ピップが罪とは断言できない行為に罪の意識を感じていると言っている。また、リーヴィス(Leavis)の言葉を借りれば、ピップは「罪の意識はあるが無実(guilty yet innocent)」<sup>21</sup>の状態にある。

ピップは、罪だと断言できない行為に罪の意識を抱いている。それゆえ彼は、自分の罪の意識の原因を断定して、犯した罪を償い、罪の意識を和らげることができない。だから彼が犯したと断言できる唯一の罪、常に誠実で愛情深かったジョーへの忘恩という道徳的罪について、直接本人に謝罪しその許しをもらった後でも、彼は罪の意識に苛まれる。ピップの語りが、“Pip’s story does move forward in time, of course, but ... the narrative keeps hovering back over the past, a past of unidentified guilt and of shame and fear”<sup>22</sup>という印象を与えるのもそのためである。しかし、罪の意識を背負い続けるピップは、どうにかしてそれから逃れようとする。そのために、彼は幼い頃の自分に戻りたいと思う。

第一巻の終りでは、紳士になるために田舎を出てロンドンへ向かうピップが見た田舎の様子が“the village was very peaceful and quiet, and the light mists were solemnly rising, as if to show me the world, and I had been so innocent and little there, and all beyond was so unknown and great”(157)と語られる。*Paradise Lost*との類似性が指摘されるこの描写で<sup>23</sup>、ピップの田舎は「穏やかで静かな」楽園のような場所で、ピップは「無垢で幼かった」と述べられている。しかし、ピップが姉たちに虐げられていた所である彼の田舎は決して楽園のような場所ではなかった。また、そこにいた頃のピップが自分を楽園に住む「無垢な」住人のように考えていなかったことは、この小説の第一巻から明白である。それゆえ、上の引用は事実の正確な描写よりも、田舎や幼い頃の自分に対する語り手ピップの思いが強く反映された語りだと考えられる。

幼い頃の自分に対する語り手の思いは、ジョーについての彼の語りからも分かる。従来  
の批評では、ジョーの人物像は大きく分けて次の2つの捉え方がされてきた。1つ目は、  
彼の善良さや純粋さを賞賛したり<sup>24</sup>、その美点を神性に見なしたりする解釈<sup>25</sup>。2つ目は、  
彼の美点を認めながらも、ピップの人生の導き手になれない彼の無力さを指摘する解釈で  
ある<sup>26</sup>。この2つの解釈はジョーを肯定的か否定的に捉えるという点で異なっているが、  
両者とも彼が善良で無垢な存在であることは認めている。さらに、ジョーの鍛冶場や彼が  
住み続ける田舎がしばしば“paradise”<sup>27</sup>と解されることから、ジョーは楽園に住む無垢  
な者という印象を強く与える人物であることが分かる。実際、語り手ピップがそれを強調  
して語っている。例えば、彼はしばしばジョーを“a mild, good-natured, sweet-tempered,  
easy-going, foolish, dear fellow”(8)や“O dear good faithful tender Joe”(139)、或いは  
“gentle Christian man”(458)と過度に賞賛し、純粋さや子供っぽさを強調する。彼がジョ  
ーについてこのような語り方をするのは理由がある。彼はジョーの初登場の場面で、少  
年時代の自分にとってジョーは「体の大きな子供」で「自分と同等の者」(9)だったと言い、  
2人は「対」(10)や「受難者仲間」(11)だったと述べる。食事の場面では、ミセス・ジョ  
ーが「2つ(two halves)」に分けたパンの「1つ」がジョーに、「もう1つ」が幼いピップ  
に与えられるのが普段の様子として語られる(10)。これらは、幼いピップとジョーは同種  
の一对の人物だったことを表している。語り手ピップは、ジョーを幼い頃の自分の対、或  
いは分身的存在と見なそうとしている。それゆえ語り手ピップが、ジョーの純粋無垢さを  
強調するとき、かつての自分もそうだったことを主張していることになる。

幼い頃の自分は罪とは無縁の純粋無垢な存在だったと、語り手ピップは考えている。第  
一卷の終りで語り手ピップは、事実と反して彼の田舎を楽園、少年時代の自分を無垢な存  
在として描いている。ここで彼は過去を理想化している。彼が自分の少年時代を理想化し  
ていることは、ジョーの子供であるピップの描写からも分かる。初めて彼がその子供を見  
たときの様子は、次のように語られる。

There, smoking his pipe in the old place by the kitchen firelight, as hale  
and as strong as ever though a little grey, sat Joe; and there, fenced into  
the corner with Joe's leg, and sitting on my own little stool looking at the  
fire, was – I again! (475)

ここでジョーの子供を「私」と呼ぶ語り手は、少年時代の自分とその子を同一視している。一方、少年時代の本当のピップは、小説の冒頭で次のように語られている。

I found out for certain ... that the low leaden line beyond [the marshes], was the river; and that the distant savage lair from which the wind was rushing, was the sea; and that the small bundle of shivers growing afraid of it all and beginning to cry, was Pip. (3-4)

この引用と先の引用を比較すると、文構成に明らかな類似が見られる。2つとも、語られる対象物の属性を説明する言葉を多く連ねたあと、単音節の動詞を挟み、その対象物の名を挙げています。しかしこの類似性とは対照的に、2つの引用の内容は明らかに異なっています。前者のジョーの子供は、暖かな火の前でジョーに守られながら座っている。一方、後者の少年時代のピップは、荒涼とした沼地や川を前に「それらに怯え泣き出しそうなちっぽけな震えている塊」でしかない。この文構造の類似性に対する内容の違い、実際の少年ピップと語り手が「私」と呼ぶジョーの子供の状況の違いは、語り手ピップが少年時代の自分を理想化していることを分かりやすく示している。過去を理想化している語り手は、彼が無垢だったと信じる幼い頃、ジョーの「対」や「同等なもの」だった頃に戻りたいと思っている。「(ジョーと仲良く暮らしていた)懐かしい台所以来の全ての人生が治まった高熱によって引き起こされた精神的混乱の1つ」(461)であれば良かったのにとこの思いを、つまり実際に起こったことではなかったら良かったのにとこの思いを、語り手ピップは未だに持ち続けているのだ。

罪の意識から逃れたいピップは、現在に至るまで、過去を消し去り、幼い頃から人生をやり直したいと願っていた。しかしその一方で、彼は過去を「不変のかたち」(450)と捉え、過去は変えることも戻すこともできないことを認めている。さらに、時の流れを過去のある時点で止めようとしたミス・ハヴィシャム(Miss Havisham)を通して、彼自身が「創造主の定めた摂理」(394)と呼ぶ連続的で不可逆的な時間の流れに背こうとすることは、「虚しさ」(394)しか生まないことも知っている。だから彼は、幼い頃から人生をやり直したいという願望を捨て、過去を受け入れようとする。そのために、消去したいと思っ

ていた過去を敢えて語った。自らの過去であるこの物語を語ることで、ピップは、その作者(author)と同時にその創造者(author)になろうとした。その行為を通して彼は、自らの過去の上に立つ統治者となり、その過去を受け入れようとした。

自伝執筆を途中で放棄したあと、ディケンズは彼の自伝的小説 *David Copperfield*(1849-50)を書いた。この小説の中でディケンズは、デイヴィッドを通して、彼が堅く口を閉ざし続けた自らの辛い過去、靴墨工場時代の出来事を語った。ディケンズは、辛く拒絶したい自らの過去を語ることでそれを受け入れ、“how all these things have worked together to make me what I am”<sup>28</sup>をはっきりと知ろうとしたのだ。ブルーム(Bloom)が、この作品がディケンズにとっての“the first therapeutic novel”<sup>29</sup>と呼ぶのももっともである。そしてピップもまた、ディケンズと同じ目的から自らの過去を語る。

ピップがこの物語を書くのは過去を受け入れるためだった。とすれば、語り手ピップの年齢はクロノロジーの批評家たちが主張する 60 歳前後ではなく、小説の終りでのエステラとの再会直後の 30 歳半ばだと考えられる。そう考える根拠として、次の3つのことが挙げられる。1 つ目の根拠は、小説の終りでピップが、エステラに求められた和解と許しの言葉を与えているからである。ピップのエステラとの最初の出会いは、「今まで一度もジョーと離れたことのなかった」(52)彼が、1 人でサチス荘を訪れたときである。このときピップは、初対面の彼女に「ざらざらの手(coarse hands)」をして「どた靴」を履いた「卑しい労働者階級の少年(common labouring-boy)」(59)と侮辱される。その結果、ピップは自分自身のみならず、ジョーや彼の職業の鍛冶屋を含む自分に関わる全てのものを「粗野で卑しい(coarse and common)」ものとして軽蔑し嫌うようになる。それと同時に彼は、エステラを愛し、彼女を得るために地位と金のある紳士になりたいと思うようになる。だから遺産を得る機会が与えられたとき、彼は迷わず鍛冶屋の仕事とジョーを捨てて紳士になる道を選び、その後はジョーを粗野で無教養な労働者として軽蔑し疎外し続ける。このようにエステラは、ピップがジョーから離反した原因となった人物である。

ところで、現在のピップは、ジョーと同様の無垢な人間に戻りたいと強く思っていた。だから、現在の自分がもはやジョーの「対」や「同等なもの」ではなくなったという事実を拒絶しがっていた。このことは、エステラが原因で自分とジョーの間にそれまでに起こったこと、つまり無垢喪失の過程でもあった過去を受け入れることがピップにはできなかったことを表している。しかし、ピップがジョーとの離反の原因であるエステラに許しを与えるには、自分がジョーと離反したという事実を認めなければならない。ジョーとの

関係の変化の過程である過去を受け入れなければならないのだ。それゆえ、エステラに和解と許しの言葉を与えたとき、彼は過去を受け入れる決意ができたと言える。このことから、この物語はピップが過去を受け入れるために語られているのだから、エステラに和解と許しの言葉を与えた直後の 30 歳半ばに語り始められたと考えられる。

2 つ目の根拠は、小説の終りでのエステラの行動に見いだせる。この小説の主人公ピップと女主人公エステラとは、各々のパトロンとの係わりという点から見ると、類似性を持っている。例えば、かつて紳士然としたコンペyson(Compeyson)に陥れられたマグウィッチは、ピップを自分の分身にし、そのピップを通してコンペysonと彼を擁護した社会に復讐しようとした。一方、婚約者だったコンペysonに裏切られた過去を持つミス・ハヴィシャムは、彼に対する復讐心から、エステラという分身を通して彼と同じ性を持つ世の男性たちに復讐しようとした。このようにピップとエステラは、パトロンの分身や彼らの復讐の道具にされていたという共通性を持つ。そしてこのような共通性を持たせることで、ディケンズは、ピップとエステラを一对の人物として描いている。さらにディケンズは、ピップの対の存在であるエステラを通して、小説の終り以降のピップ、つまり語り手である現在のピップについて暗示しようとしていると考えられる。

小説の終りでのエステラとの再会の前に、ピップは自分と同じ名を持つジョーの子供のピップを墓地へ連れて行く。そして、マグウィッチがピップのパトロンになる契機となった 2 人の出会いのときに、彼が少年だったピップを墓石に座らせたように、ピップは、ジョーの子供を「ある特定の墓石(a certain tombstone)」(475)に座らせる。つまり、かつて自分が座らせられたのと同じ墓石に座らせる。この後に、ピップはビディに少年ピップをくれるか貸してくれと頼む。マグウィッチがピップを彼の分身にしたように、ピップも自分の分身を作ろうとした。マグウィッチが少年ピップに出会ったのと同じ季節の 12 月に 30 歳半ばのピップが取ったこの行動は、彼がマグウィッチの人生を反復することを予期させる。もしピップがマグウィッチの人生を反復したのであれば、彼は自分のパトロンのマグウィッチと同じように長い間過去に固執する人生を送ったことになる。そして、マグウィッチが死んだのと同じくらいの年齢のとき、つまり 60 歳前後のときに、ピップがようやく過去に執着することを止め、それを受け入れられるようになったという推測も成り立つ。しかし、彼の対として描かれているエステラの行動を考慮すれば、そのような解釈はできない。

エステラは、小説の終りで未来に向かって歩み始めるためにミス・ハヴィシャムの屋敷

の跡地に別れを告げに来る。そのとき彼女は、偶然ピップに出会い、和解と許しの言葉を求める。エステラにとってピップは、かつて彼女が「価値も分からずに投げ捨ててしまったもの」(478)であり、後悔というかたちで彼女を過去に縛りつけるものであった。そのピップから許しと和解の言葉を得ることで、彼女はその束縛から放たれたのである。かつての彼女は、「心を持たない」(235)人間だったが、このときの彼女は「悲しみに和らいだ」瞳と「親しげな感触」の手(477)を持つ人間に変わっている。ミス・ハヴィシャムと同じ「蠟人形」(57)のようになるのを避けることができたのだ。彼女は、過去に執着し、そこに留まり続けることで生ける屍と化したパトロンの人生を繰り返すことを拒絶している。このエステラの行動を考慮すれば、彼女の対であるピップもパトロンの人生を反復することを避けたと考えられる。それゆえ、語り手ピップの年齢が60歳であるとは解釈できない。パトロンの人生を反復することを避けようとするエステラと再会したこのときに、ピップもまた過去に固執することを止め、それを受け入れる決意をした。このように解することを、ピップとエステラを一对の人物として描いたディケンズは、読者に求めていると考えられるからだ。このことから、ピップが過去を受け入れるためのこの物語を語り始めたのは、エステラとの再会の直後、つまり30歳半ばのときだと解釈できる。

3つ目の根拠は、この小説がしばしば“Pip’s Bildungsroman”<sup>30</sup>と称されることと関係する。エステラとの出会い以降、ピップは、金や地位などの外面的なものにしか価値を見いだせないスノビズムという悪徳に陥っていく。だが、命を賭してまで彼に会いに来たマグウィッチを助けようとする中で、彼はそこから脱して行く。最終的に、ピップは、単なる醜い囚人としか見えなかったマグウィッチが、ピップに対する強い愛情と感謝の念を抱き続けてきた良き人間であることを理解した。そのときピップは、外面的な価値のみに囚われることなく、他者の内面的な価値を見いだせるようになった。ゆえにピップの「第二の父」(315)であると主張するマグウィッチは、ピップのこの変化の過程で彼の成長を促した人物であり、ピップの“savior”<sup>31</sup>と称されている。そしてこの救済者を通してピップは、人間の内面的な価値という道徳的真實だけではなく、ハーストが言うように“a sense of the impossibility of bending the past ‘out of its eternal shape’”<sup>32</sup>という時間の真實をも学ぶ。だからこそ、この小説がピップの成長を扱う教養小説と呼ばれているのだ。

一方、ピップの養父でもあったジョーは、マグウィッチの死後に病に伏せながら「再び幼いピップに返った」(461)気分になっているピップに、子供時代の彼に対して使っていた“old chap”ではなく、“sir”と呼びかけている(465)。つまりジョーは、間接的に、「再び幼い



ピップに返る」ことはできないことを、ピップに教えている。だからジョーは、フランクリン(Franklin)が言うところの“a purely Christian attitude toward time and change”<sup>33</sup>、すなわち、連続的で不可逆的な時間の流れを説いていることになる。さらに、ピップの生みの親であるディケンズもまた、ジョーとビディを結婚させることで、ビディと結婚して昔の自分に戻ろうとするピップの行動を阻止し、彼に時間の不可逆性を説いている。

この小説には、連続的で不可逆的な時間の流れに逆らおうとした2人の登場人物がいる。ミス・ハヴィシャムとマグウィッチである。この2人は、コンペysonへの復讐心から自分自身を過去に束縛し、時間の真実に背くという過ちを犯す。しかし、ミス・ハヴィシャムは、過去に執着し続け、エステラとピップを過去に復讐するための道具としていたことが愚かなことだったと、死の直前に気づく。彼女は強い後悔の念を抱いたまま死ぬ。一方、マグウィッチも過去に固執し、復讐するためだけに人生を費やしてきた。ただし、死に瀕したときの彼についての描写では、彼の喉元から聞こえる音が、彼の他の全てのものと同様に「和らいだ」(442)と語られる。彼の喉の音は小説中で「時計」(19)の音に例えられていることから、この描写はマグウィッチが過去の束縛からようやく解放されたことを暗示している。ミス・ハヴィシャムとマグウィッチは、不可逆的な時間の流れに逆らおうとし、自らを過去に束縛したが、最終的には2人共、その束縛から放たれることができた。だが、それは彼らの死の直前であり、遅すぎた。結局のところ、彼らは時間の真実に従って生きることができなかったのだ。そして、ピップに時間の真実を説いているマグウィッチ、ジョー、ディケンズの3人のピップの「父親」は、ピップにその2人と同じ人生を辿ることを止めさせようとしている。3人の父親は、彼に時間の真実を学ぶように仕向けている。

ところが、もしピップが過去に固執することを止めて、この物語を語り始めたのが60歳前後だとすれば、彼はミス・ハヴィシャムやマグウィッチが死んだのと同じ年齢ぐらいまで過去に拘り、束縛され続けたことになる。つまり、彼は3人の忠告を完全に無視したことになる。だからこのような行為を、教養小説の要素をも持つこの小説の主人公が取ったとは考え難い。なるほどピップは、物語の中では3人の「父親」の説く時間の真実をすぐに受け入れ、それに従うことはできなかった。しかし、小説の終りでのエステラとの再会という過去を受け入れるための最大の機会を与えられたときに、ピップが3人の「父親」の教えに背くことを止めたと考えられる。

罪の意識の苦しみから逃れるために、ピップは幼い頃に戻りたいと思いつけてきた。だ

が、彼がその願望を捨てて過去を受け入れるためにこの物語を語った。だとすれば、以上で述べた3つの理由から、語り手ピップが自らの過去を語り始めたのは小説の終りでのエステラとの再会直後であり、彼が30歳半ばの頃だと結論づけられる。すると、本論文の冒頭で挙げたクロノロジーの批評家たちが、語り手ピップの年齢を60歳前後と判断する根拠とした小説連載当時の時事問題であるチャタムでの囚人の暴動やテンプル周辺での築堤工事についての言及は、アナクロニズムということになる。しかしそれらは、単なるアナクロニズム以上の意味を持つ。つまり、サドリンが主張しているように、当時の時事問題への言及は語り手と読者の結びつきを強める働きをしているのである<sup>34</sup>。語り手ピップの現在を1860-61年とする彼女の意見には賛同できないが、時事問題への言及が読者に与える影響についての指摘は首肯できる。ディケンズはアナクロニズムという失敗を犯したのではなく、それらを使ってピップの物語に対する読者の親近感を生み出そうとしたのだ。その結果、この小説には語り手ピップの現在と小説連載当時の現在という2つの現在が存在することになった。

#### 註

- 1) Beth F. Herst, "Will and Gentility: *Great Expectations* and the Problem of the Gentleman," *The Dickens Hero: Selfhood and Alienation in the Dickens World* (New York: St. Martin's Press, 1990) 122.
- 2) Robert Garis, "*Great Expectations*," *The Dickens Theatre: A Reassessment of the Novels* (Oxford: Clarendon Press, 1965) 196.
- 3) K. J. Fielding, "The Critical Autonomy of *Great Expectations*," *A Review of English Literature* 2 (1961): 83-84.
- 4) 田辺洋子, 「*Great Expectations* の2つの結末: 語り手の側からの読解の試み」『英文学研究』71. 2 (日本英文学会, 1995): 118.
- 5) 廣野由美子, 「Dickens の < 子供の視点 > *Great Expectations* について」『英語と英米文学』32 (山口大学, 1997): 301.
- 6) Anny Sadrin, *Great Expectations* (London: Unwin Hyman, 1988) 42.
- 7) Jerome Meckier, "Dating the Action in *Great Expectations*: A New Chronology," *Dickens Studies Annual* 21 (1992): 185.
- 8) David Paroissien, *The Companion to Great Expectations* (Mountfield: Helm

- Information, 2000) 10.
- 9) Sadrin 34; Meckier 185; Paroissien 10.
- 10) Charles Dickens, *Great Expectations*, ed. Margaret Cardwell (Oxford: Oxford UP, 1998) 30. 本論文のテキストにはこの版を使用し、以下、引用は括弧内に頁数を示す。
- 11) Sadrin 34; Meckier 186; Paroissien 10.
- 12) Charles Dickens, *Nicholas Nickleby*, ed. Paul Schlicke (Oxford: Oxford UP, 1998) 57.
- 13) Meckier 186.
- 14) Lois E. Chaney, "Pip and the Fairchild Family," *The Dickensian* 79 (1983): 162.
- 15) Sadrin 35; Meckier 187; Paroissien 10.
- 16) Paroissien 9 n.
- 17) G. Robert Stange, "Expectations Well Lost: Dickens's Fable for His Time," *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*, ed. Michael Cotsell (1954; Boston: G. K. Hall, 1990) 72.
- 18) Dorothy Van Ghent, "On *Great Expectations*," *The English Novel: Form and Function* (New York: Rinehart, 1953) 133-37.
- 19) Julian Moynahan, "The Hero's Guilt: The Case of *Great Expectations*," *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*, ed. Michael Cotsell (1960; Boston: G. K. Hall, 1990) 80-85.
- 20) J. Hillis Miller, "*Great Expectations*," *Charles Dickens: The World of His Novels* (London: Oxford UP, 1958) 272.
- 21) Q. D. Leavis, "How We Must Read *Great Expectations*," *Dickens the Novelist* (New York: Pantheon Books, 1970) 308.
- 22) George Ford, "Dickens and the Voices of Time," *Nineteenth-Century Fiction* 24 (1970): 431.
- 23) Paroissien 172; Charlotte Mitchell, "Notes," *Great Expectations*, ed. Charlotte Mitchell (Harmondsworth: Penguin Books, 1996) 493.
- 24) Harry Stone, *Dickens and the Invisible World: Fairy Tale, Fantasy, and Novel-Making* (Bloomington: Indiana UP, 1979) 311.
- 25) Elliot L. Gilbert, "'In Primal Sympathy': *Great Expectations* and the Secret Life,"

- Dickens Studies Annual* 11(1983): 102.
- 26) Leavis 302-03, 326.
- 27) William A. Wilson, "The Magic Circle of Genius: Dickens' Translations of Shakespearean Drama in *Great Expectations*," *Nineteenth-Century Fiction* 40 (1985): 174.
- 28) John Forster, *The Life of Charles Dickens* (1872-74; London: J. M. Dent & Sons, 1927) vol.1, 32.
- 29) Harold Bloom, "Introduction," *Charles Dickens*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1987) 6.
- 30) John P. McWilliams, Jr., "*Great Expectations*: The Beacon, the Gibbet, and the Ship," *Dickens Studies Annual* 2 (1972): 256.
- 31) Stone 310.
- 32) Herst 119.
- 33) Stephen L. Franklin, "Dickens and Time: The Clock without Hands," *Dickens Studies Annual* 4 (1975): 30-31.
- 34) Sadrin 36.

出典： 『関西レビュー』 第 21 号（関西英語英米文学会, 2002） 111-20.